

静私・なだより



くっついた! ほんとだー

- 協会創立五十周年記念式典の開催
- 特集「幼稚園ICT化計画(その3)」井内 聖
- 特集「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達(その1)」遠藤利彦
- コミュニティ(保育の窓)
- もの想い(認定こども園わかば幼稚園／静岡聖光幼稚園)
- 健康随想「新型コロナウイルスと子ども・保護者の健康」宮入 烈
- ナイスショット



NO.191
2021③
Spring

協会創立五十周年記念式典の開催

令和二年十一月二十四日（火）午後一時三十分から、ホテルグランヒルズ静岡（旧ホテルセンチュリー静岡）において、一般社団法人静岡県私立幼稚園振興協会の創立五十周年記念式典が開催されました。

当協会が設立された一九七〇年と云えば、「人類の進歩と調和」をテーマに世界各国から六四二一万人が来場した大阪万博が開催された年であり、まさに新時代の幕開けの象徴でした。

五十周年という大きな節目の年ですが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、当初予定していました記念講演や祝賀会を取りやめ、記念式典のみとなりました。出席者も協会の理事、監事と各地区から二人ずつという少人数とし、席の配置はソーシャルディスタンスを確保し、受付や演台、司会台は飛沫飛散防止のためアクリル板を設置しました。

■開会の言葉／物故者への黙祷

式典は、田中邦昌副理事長の開会の言葉から始まり、CD演奏のみによる国歌斉唱、これまでに亡くなられた方への黙祷と続き、千葉理事長の式辞が述べられました。

■千葉一道理事長式辞

本日、一般社団法人静岡県私立幼稚園振興協会創立五十周年記念式典のご案内をさせていただきましたところ、ご公務ご多忙の中、静岡県知事川勝平太様、静岡県議会議長山田誠様、はごろも教育研究奨励会会長後藤康男様はじめご来賓の皆様には、わざわざお足をお運びいただきまして有り難うございます。

当協会五十周年の式典開催については、新型コロナウイルス禍であるため、延期を含めて検討した結果、節目の年である本年開催することが重要であるということから、本日の開催となりました。協会園の皆様には参加人数を制限しての開催にご

協力をしていただきましたことにこの場をお借りしましてお礼申し上げます。さて、本協会は昭和四十五年十一月社団法人静岡県学校法人幼稚園教育振興会と静岡県私立幼稚園協会を一本化して「社団法人静岡県私立幼稚園振興協会」を設立し、静岡県の幼稚園教育の発展に大きく貢献してまいりました。また、近年は多様化するニーズに応じた特色ある教育の推進が求められており、それぞれの園では建学の精神に基づく個性豊かな活動を展開しているところであります。

五十年前を振り返りますと、設立当初に静岡県教育委員会から認可をいただき研修委員会を立ち上げ、現在では教員研修、理事長・設置者、園長研修をはじめ研修事業が充実してまいりました。基本研修では初任者研修、二年目・三年目研修、主任教員研修など、専門研修では特別支援教育研修、乳幼児研修など、特別研修においては昭和五十一年の教育奨励事業として教育環境の視察を契機に発足した海外研修が昭和五十二年から始まり、中華人民共和国・スイス・西ドイツ・イタリア・アメリカ・ベルギー・フィンランド・スウェーデンなどを訪問し外国の幼児教育制度、教育事情を学ぶため教員を派遣し、現在に至っております。お

かげさまで本協会の研修力は全国でも優秀な成果を果たしております。

当協会県内十一地区におきましては、地域子育て支援事業を実施し、子育てフェア、すこやか子育て相談、子育て支援カウンセラーなど地域子育て環境の良質化に寄与していただいております。

当協会では園の健全経営を図るために、経営分析情報の提供や各市町の行政関連の情報提供、事務職員の研修などを実施し、学校法人の適切な会計処理を支援しています。

静岡県は駿河湾沖地震発生が長年叫ばれており、南海トラフと併せて早くから地震防災の備えが進み、当協会園におきましては九十九・七％が耐震対策補強を実施し、子どもの安全確保がなされていることに協会として自負しているところであります。

以上の事業以外にも多くの協会事業を実施していますが、これらも五十年の歩みの中で培われてきた重要な事業であります。

創立当初は、想像を絶するほどの困難があり、役員、事務局の皆様にはご苦労されて運営されてきたものと拝察致します。

当協会のシンボルであります「協会旗」



は創立十周年を記念して協会関係者の公募で、島田市の保護者が図案した「子どもたちが手をつなぎ、先生と子どもが手をつなぎ、それを温かい地域の手に守られて巣立っていく子どもの姿」を表し、四十年に亘り使用させていただきました。

今回五十周年を期に、ふじのくに静岡に相応しく、世界遺産の富士山のように「美しく、気高く、堂々」としてだれにも愛される子どもの姿」を富士山として加えて新しい「協会旗」を制作致しました。

私たちはこの機会に、諸先輩の意思をしつかり受け継ぎ、私学人として私立幼稚園の幼児教育を伝承してまいります。



五十年の間、協会をお支えいただきました県学事課、現在のスポーツ・文化観光部私学振興課様、静岡県議会議員連盟様、はごろも教育研究奨励会様ほか関係の皆様には大変御世話になりました。今後ともよろしくご指導賜りますようお願い致します。

本日、長年に亘り当協会の役員としてご貢献いただきました先生方に感謝状を授与させていただきます。

また、協会の全ての教職員に心ばかりの記念品を用意しましたので贈呈させていただきます。衷心より感謝申し上げます。

なお、本日お配りいたしました五十周年記念誌は「遊」と題しました。「子どもの仕事は遊びである」と言われるように、子どもの発達に重要な意味を持っています。遊びを通して社会のルールを養ってほしいと希望します。

「私学はひとつ」、「教育は私学から」を協会の教職員全員が胸に刻み、私立幼稚園の教育が静岡県の子ども更にはそのご家庭の幸せに寄与できるよう努力してまいります。当協会が六十年七十年そして百年の時を迎えることができますよう今後とも、皆様のご支援並びにご協力を賜りますようお願い申し上げます。

■感謝状贈呈

式辞の後、当協会の役員として本県の私立幼稚園の振興発展に多大なご尽力を頂いた方々に対し、千葉理事長から感謝状が贈呈されました。

〈感謝状贈呈者〉

加藤鉞夫氏（学校法人蛸塚幼稚園理事長）

相田裕司氏（学校法人相育学園理事長、

金谷幼稚園園長）

柿野敏和氏（学校法人城北学園てるみ幼稚園園長）

相田芳久氏（学校法人相愛学園理事長）

森 俊彦氏（学校法人瑞光学園理事長、

河輪幼稚園園長）

大石和正氏（学校法人大石学園理事長）
出席された感謝状贈呈者の中から、森俊彦氏が代表して謝辞を述べられました。

■来賓祝辞・閉会の言葉

来賓の祝辞では、川勝平太静岡県知事と山田誠静岡県議会議長から、「子どもたちが豊かな人間性を身に付け、心身ともに健やかに成長していくため、魅力的で特色ある幼児教育を実践できるよう、引き続き、貴協会と手を携えて、私立幼稚園の振興施策を強力に推進してまいります。」と、力強いお言葉を頂きました。来賓として出席された公益財団法人はごろも教育研究奨励会の後藤康雄理事長、静岡県スポーツ・文化観光部の吉良光陽総合教育局長と大石昌宏私学振興課長の



紹介に続き、協会加盟園の教職員への記念品贈呈が行われました。園の業務に使用できる五十周年記念のクリアファイルを渡邊太郎富士宮地区長が代表して受け取られました。

幼稚園賛歌斉唱（CD）の後、宮下友美恵副理事長の閉会の言葉で約一時間の式典は無事終了の運びとなりました。

式典の様子は、会場に来ることができない各園の皆様がご覧になれるよう、YouTubeによるライブ配信を行いました。



幼稚園 ICT 化計画

新しい働き方を目指して (その3)

井内 聖 (学)リズム学園学園長・恵庭幼稚園長

公立中学校教員を9年勤め、04年幼児教育へ転身。08年恵庭幼稚園長、14年学園長、学園内の保育園や子ども園の園長を歴任。北海道大学大学院教育学研究院乳幼児発達論研究室在籍。

▶平成30年北海道胆振東部地震では安平町はやきた子ども園長としてお泊まり会中に被災(震度6強)子どもの居場所として被災2日後から園を地域に開放し、応急保育を行う

▶ICT活用の先進的な取り組みは全国から注目され、毎年150人を超える視察者が訪れる



新型コロナウイルスが国内で流行し始めても、もなく1年が経とうとしています。この原稿を書いている時点では2回目の緊急事態宣言が発表され、状況が収まる様子が見られません。元の状態に戻ってほしいと願ってもそれが見えないのならこの状況を受け入れて前に進むしかない。保育園現場の働き方改革と園のICT化について保育学会で発表したのが平成30年。その時の反応は「これからは必要ですね」程度でした。それがこのコロナ禍で社会全体のDX(デジタルトランスフォーメーション)が加速しICT化が進みました。しかしICT化は働き方改革ではありません。改革のためにはまず現状の整理が必要です。今回は保育現場を質と量の視点から捉え、ICT化の目的を考えたいと思います。

保育現場の現状の整理

平成30年4月改訂された幼稚園教育要領の本格実施が始まりました。今回の改訂では育みたい資質・能力や10の姿などが示され、今まで以上に幼小の接続などを意識した保育を展開することが求められるようになりました。また現場ではこれら要領・指針の理解や実践に加え、保育記録(ドキュメンテーションなど)、個別の支援が必要な園児への配慮、保護者支援など多岐にわたって取り組むべき課題が多くあります。

一方、保育士不足は深刻です。待機児童解消を目的とした保育の量の拡大は労働者としての保育者不足を招き、どの園も先生が足りず、また求人を出しても募集が集まらない状況が見られます。小規模や企業主導型といった新しいタイプの保育施設、処遇改善とそれと連動するキャリアアップ研修制度の新設など保育者の労働を取り巻く環境も大きく変わっています。

保育現場を見たとき、よく質と量の議論はされますが「保育」と「労働」の視点で整理されることはあまりなかったように思います。質か量かではなく、「保育」と「労働」の視点で保育現場を見ていくと違った世界が見えてきます。

「保育」と「労働」の関係

「保育」から考えて「労働」を当て込む

- ⇒ 質を高めるために量を積み重ねる
- ⇒ 「保育」にゴールはない(量が増え続ける)
- ※生産性が低く長時間労働につながる(日本的)

「労働」から考えて「保育」を当て込む

- ⇒ 限られた量の中で質を高める
- ⇒ 量の調整が質の向上につながる
- ※生産性が高まる(欧米的)

うと考えれば考えるほど時間は過ぎていきます。そして保育の質にゴールはありません。量は増え続け長時間労働につながりかねません。(日本的な生産性の低い働き方)これが今の保育現場から見た労働のように思います。

次は労働から保育を見ます。労働は基準法で1日8時間と決まっています。その労働に保育を当て込むのです。こちらは労働時間が決まっていますのでどんなにやりたいこと、やるべきことがあっても限られた量(時間)の中で質を高めなければいけません。何をどこまでやり、何をやらないか。量の調整が質を高めることにつながります。欧米的な生産性を高める取り組みです。

保育者の専門性とは

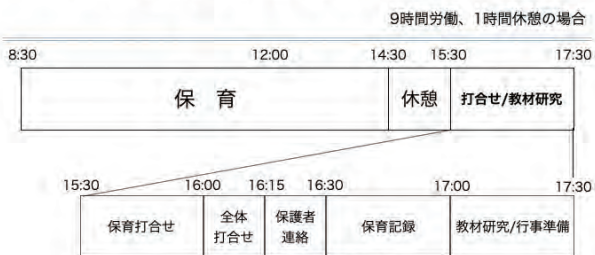
この対比だけ見ると労働から保育を当て込むほうが良いとなるのですが、そう簡単な話ではありません。1日8時間の勤務時間のうちノンコンタクトタイムと呼ばれる事務業務に時間はどれくらい保障されているでしょうか。一般的な園で考えても2時間くらいがやっと思えます。その2時間で何ができるでしょうか。この時間で取り組んでいる業務は保育の質に直

まず保育から見てみましょう。対比は労働ですから保育から考えて労働を当て込んでみます。保育の質を高めるためには量が必要です。要領指針の学習も保育記録の作業も個別の支援計画も時間が必要です。明日の保育も工夫しよ

結しているものでしょうか。そのことを調査するため保育士バンクの協力を得て全国の保育者を対象にSNSを使ったWebアンケートを取りました。(平成30年保育学会発表Webアンケートにしたのは園を通さないことで現場の本音が反映されるようにするためです。)

結果については表の通りです。現金管理や園内清掃、写真販売などは保育者が担う必要がないと回答する割合が多かったです。また負担軽減が可能な業務として教材準備、装飾、バス添乗、出席簿などがありました。結果を考察する中でポイントになると思われたのは「軽減が難しい」と回答した業務です。具体的には提出物管理、行事準備運営、出席簿、書類作成などです。これらは毎日ある業務であつたり頻繁では

保育者の1日(幼稚園)



1日2時間しか取れない

- ※保護者連絡は15分で終わるか?
- ※教材や行事準備は30分で終わるか?
- ※そもそも休憩は取れるのか?

ないにしても負荷の多い業務です。これらを軽くすることが量を調整することにつながるかがわかりました。

結果①	登降園対応	バス添乗	現金管理	給食対応	園内清掃等	提出物管理	行事準備運営等	出席簿管理処理	保育教材作成準備	保育室装飾環境
専門性の必要な業務	19%	18%	4%	19%	8%	18%	39%	20%	26%	28%
軽減が難しい業務	17%	13%	8%	17%	7%	22%	25%	25%	15%	11%
負担軽減可能な業務	34%	37%	15%	34%	34%	38%	34%	38%	43%	45%
保育者が担う必要のない業務	30%	32%	73%	30%	51%	23%	2%	17%	16%	16%

結果②	文書作成書類作成	保育記録園児理解	保護者会関係等	写真販売	ボランティア対応	指導計画作成等	児童要録作成	道具安全管理	特別支援
専門性の必要な業務	24%	75%	16%	2%	5%	71%	71%	22%	68%
軽減が難しい業務	28%	15%	25%	2%	8%	16%	17%	17%	19%
負担軽減可能な業務	30%	9%	30%	11%	37%	12%	10%	32%	11%
保育者が担う必要のない業務	19%	1%	29%	85%	50%	1%	1%	28%	2%

各項目上位4つを抽出

その仕事は保育者でなければいけな

いかに
繰り返すことになりますが量の調整が質を高めることにつながります。そして先生達の時間は限られています。となると何かを削減しなければいけません。現金管理は有資格の先生がやらなければいけない業務でしようか。登園状況の把握は必要ですが出席簿という作業は先生でなければいけないでしようか。提出物は紙でなければいけないでしようか。小学校の先生はスクールバスに添乗しません。

先生達は保育がしたい
ンターネット保存するとSDカードを使わなくなります。データ移行作業がなくなります。出欠連絡を保護者がスマホでするようになります。電話対応がなくなり連絡ミスもなくなります。学校評価をWeb回答にすると集計作業がゼロになります。10年前までのIT技術は人の手がパソコンになるくらいでした(ワードやエクセル)。しかし今の情報技術では人がやっていた管理業務を限りなくゼロに近づけることができます(ワードやエクセルからの脱却)。

ICT化というとにかくパソコンを導入してデジタル化するというイメージがあるかもしれないが手書きの書類をパソコンにしても印刷配布の業務は残ります。手書きのチェック表をエクセルでつくってもチェックする作業はなくなりません。保育の質を高めるためには先生がその専門性を活かした業務に特化して就くこと。別に言えば先生でなくてもできる仕事は先生はしない。不要な仕事はしないということ。そして、それらの中でデジタルによって業務そのものがなくなるのであればICT化という方法を取ります。

例えば現金徴収を電子マネーにすると現金管理がなくなります。連絡をWeb配信にすると印刷配布作業がなくなります。提出物をWebアンケートにすると改修業務とチェック作業がなくなります。デジタルをやめてスマホで撮影しイ

ンターネット保存するとSDカードを使わなくなります。データ移行作業がなくなります。出欠連絡を保護者がスマホでするようになります。電話対応がなくなり連絡ミスもなくなります。学校評価をWeb回答にすると集計作業がゼロになります。10年前までのIT技術は人の手がパソコンになるくらいでした(ワードやエクセル)。しかし今の情報技術では人がやっていた管理業務を限りなくゼロに近づけることができます(ワードやエクセルからの脱却)。

アンケートを取ってわかったことは、やはり先生達は保育がしたいということでした。子どもと向き合う時間を取り、保育後は今日の子どもの姿を思い返し明日の保育を考える。それが一番やりたいことです。そのためには先生しかできないこと、先生の専門性が発揮されることに一番時間をとってあげるべきです。それが保育の質を高める一番の近道です。ICT化というと人の心が通わないとか機械にすべて任せるとかという声を聞くこともあります。それは逆です。先生達に保育に向き合ってもらいたいからICTを取り入れるのです。しかし、失敗するICT化もあります。それはICT化が目的となつた導入です。リズム学園の先生はバスに添乗しません。園内清掃は掃除ロボットや専任職員と分担しています。教材づくりをサポートするスタッフがいたり、シフトは結婚退職した先生が100km先でテレワーク勤務(副業)でつくっています。

■その仕事は先生がやらなければいけない(専門性が必要な)業務か
■その管理業務は人でなければいけないか
■ICT活用で業務自体がゼロにならないか
■ICTの活用で新しい働き方(需要や雇用)が生まれないか

こういった発想を持ち「労働」から考えて「保育」を当て込む。ICTはそのためのツール(道具)であり、働き方改革の手段の一つです。ICT化による働き方改革に取り組もうとしている園は、このことに留意して進めてほしいと思います。先生達は保育がしたいです。

最終回の次回は、具体的に導入しているICTのアプリやデバイス機器の事例を紹介します。何を入れたら何ができるか?どんな機器があるのか?実践編です(特定商品の紹介はしません)。

乳幼児期における アタッチメントと 非認知的な心の発達

そもそも、
アタッチメント
とは何か

その1

東京大学大学院教育学研究科教授
同附属発達保育実践政策学センター長

遠藤 利彦

えん どう とし ひ こ

1962年山形県生まれ 東京大学教育学部卒業

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学 博士(心理学)

東京大学教育学部助手、聖心女子大学文学部専任講師、

九州大学大学院人間環境学研究院助教授、京都大学大学院教育学研究科准教授、

東京大学大学院教育学研究科准教授を経て、現職

専門領域は発達心理学・感情心理学・進化心理学など

日本赤ちゃん学会理事・日本子ども学会理事・日本学術会議第25期会員など



これから4回に亘って、『乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達』というタイトルで、文章を綴らせていただきたいと思います。現在、世界の幼児教育や保育の分野では、人の生涯発達の礎をなすものとして、IQなどに代表される認知能力、すなわち、一般的には頭の良さとか頭のできと呼ばれる力以外の、一般的には「非認知」と総称される心の性質に高い関心が寄せられています。4回に亘る連載を通して、この「非認知」と呼ばれる心とはいったい何なのか、なぜそれほどまでに重要と言えるのか、またこうした心の性質は、幼少期、いかなる環境で、どのような人によるどんな働きかけを通して、培われることになるのかということについて、考察していきたいと思っています。

とりわけ、この連載では、乳幼児期に子どもが身近な大人との間で経験するアタッチメントが、この非認知的な心の発達を支え促す鍵になるという立場から、論を進めて行ければと考えています。この第1回では、そもそもアタッチメントとは何なのか、そしてまた、私たち子どもに接する大人はこれに関してどんな心構えを持つておくべきかということについて、その基本的なところを述べてみたいと思います。

もともと、日本では、長く「愛着」と言われてきたということもあってか、アタッチメントという言葉は、親と子どもとの間で交わされる「愛情」のよなもので、あるいは親子の「情緒的絆」

としてだけ理解されてきたところがあったかも知れませんが、もちろん、これは全く誤りということでもないのですが、この言葉の元来の意味は、英語の「アタッチ」(attach)そのものの、つまりはくっつくということです。ただし、いつどこるかまわず、あるいは誰彼かまわずくっつくということではなくて、私たち人が、何らかの危機に接して、恐れや不安などのマイナスの感情を経験した時に、身体的な意味でも、あるいは心理的な意味でも、(必ずしも親に限定されない)誰か特定の人にくっつくたいと強く思う感情、そして現にくっつくとうとする行動の傾向を指して言います。

危機などというときとちよつと大げさに聞かせるかも知れませんが、例えば小さい子どもにとつては、それこそちよつと転んで痛い思いをしたり、ほんの少しの間でも部屋に一人置いておかれたら、あるいはただ初めての人に出会うというようなことだけでも、恐れや不安を感じさせる危機的状况と言えるかと思えます。子どもは、そこで現に恐がったり不安がったりして、すぐに身近にいる親や保育者などに泣きながら、駆け寄りたりするかと思います。そしてくっつくことで、その恐れや不安の感情から立ち直り、また元の平常状態に戻る事ができるのです。

ここで一つ強調しておきたいのは、アタッチメントがくっつきはくっつきでも、基本的にマイナスの感情に結びついたくっつきだということです。逆

に言えば、楽しくて仕方がなくてもつと遊んで欲しくてくつつくというのは、本来、アタッチメントではありません。また、ただ皮膚と皮膚とがくつついて気持ちがいいというスキンシップとも全く違ったものです。親や保育者などに向かつてよくアタッチメントが重要ですと言ったりすると、「それって、子どもをたくさん、また長くしっかりと抱っこしてあげればよいということですよね」などと言われてしまうことも少なくありません。しかし、アタッチメントは、ただ抱っこしてあげればよいというようなことではなく、あくまでも、恐い、不安、あるいは子どもの感情が崩れた時に、大人がしっかりとそれを受け止めて、元通りに立て直してあげること、安心感を与えてあげることが大切だということのを強調する考え方なのです。

実はアタッチメントにおける最も重要な部分は、いかにこの安心感を与えられるかということであり、そのための手段はただ一つではないということです。確かに、子どもがまだ小さい頃は、抱っこなどの身体的な接触が最も効果的であることは言うまでもありません。しかし、たとえ抱っこがなくても、大人は温かな表情や声で、また言葉でも子どもに安心感を与えることができます。そして、子どもが大きくなるにつれて、徐々に、身体的なつながり以上に、こうした表情や声、言葉などによる心理的なつながりの重要性が増していくのだと考えることができます。

ここで確認していただきたいことは、子どもがどういう手段であれ、いったん、恐れや不安から立ち直り、安心感に浸ることができる、多くの場合、ごく自然な形で大人から離れ、また一人で、あるいは仲間同士で自発的に遊び始めるということです。一度、安心感を得た子どもは、大人のもとにずっと留まって、くつつき続けるということを大概はしないのです。そして、そこにアタッチメントの一つの逆説があります。それは、恐くて不安な時にしっかりと特定の大人にくつつき、その度ごとに安心感を確実に得られていた子どもほど、「何かあればあの人のところに行けば絶対守ってもらえるはず」という確かな見通しを持つことができるようになる分だけ、徐々に、あまり人にべたべたくつつかず、依存せずに、ちゃんと一人で自律的にいられるようになるということです。

アタッチメント理論の創始者であるジョン・ボウルビーという児童精神科医は、親や保育者などの大人は、子どもにとって「安心の基地」あるいは「安全な避難所」としてあるべきだということ強調していました。子どもは特に感情の崩れがなく落ち着いている時には、身近な大人を「安心の基地」として、そこを拠点に活動の範囲を広げ、いろいろなことにチャレンジしながら思い切り遊び、探索や冒険を楽しむことができます。

しかし、その探索や冒険の最中に、遊び疲れたり、転んで痛い思いをした

り、知らない人に出会ってびっくりしたりして、恐れや不安といったマイナスの感情が生じると、子どもは、今度は、信頼できる大人、すなわちあそこに行けば必ず慰めてもらえるはずの「安全な避難所」に一目散に駆け込もうとするのです。そして、そこでその大人にしっかりとくつつき安心感を取り戻し、感情の燃料補給を済ませると、再び同じ大人を「安心の基地」として勇敢に外界へと出て行こうとします。

子どもの日常は、こうしたことの繰り返しだと言えます。ある人は、こうした繰り返しを「安心感の輪」と呼び、子育てや保育の基本は、この輪をごく自然に子どもに経験させてあげることなのだとしています。ここで注意すべきなのは、基地や避難所は基本的にどっしりと構えてあまり動かないものだということです。大人にとって重要なことは、いつも子どもの後をついて回ったり、先回りして子どもがいやな思いをしなく済むようにしてあげることではなく、子どもの自律的な活動を背後から温かく「見守る」こと、「応援する」こと（「安心の基地」の役割）。しかし、子どもが感情を崩して駆け戻ってきたりした時には、今度は可能な限り、その気持ちに「寄り添う」こと、そしてそれを元通りに「立て直す」こと（「安全な避難所」の役割）なのです。

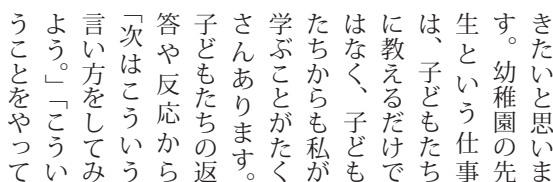
『他の生き物にも見られるアタッチメント』

実のところ、アタッチメントはヒトという生き物だけに見られるものではありません。それは広くほ乳類や鳥類など、様々な生き物の少なくとも親子の関係にはごく一般的に認められるものです。例えば、よくテレビなどで、カルガモの親子が隊列をなしてかわいらしく歩き回る様子を見たことがあるかも知れません。それはとても微笑ましい光景なわけですが、実はあれもアタッチメントの一例で、雛鳥は親鳥の後をひたすらついて回ろうとします。その行動は、親鳥がエサをくれようがくれまいが関係なしに生じてきます。つまり、雛鳥は、エサをもらおうなど、何かの他の目的のためにではなく、まさにくつつくことそれ自体を目的にした行動の傾向を生まれつき備えて生まれてくるのです。今では多くの研究者が、アタッチメントは、例えば食べたい、眠りたい、温まりたいといったいろいろな生理的欲求とまさに同じような意味で、多くの生き物にとって最も基本的な欲求としてあり、この欲求がちゃんと適切に満たされることを通して、その後の健全な成長や発達が可能になるのだと考えるに至っています。

土屋 桃花

念願の幼稚園の先生になることが

1年目の冬になり、やっと少しゆとりが持てるようになりました。だから、これからは、子どもたち一人ひとりをもっと理解して、可能性を広げたり、やりたい事の背中を押してあげたりと成長の手助けをしてい

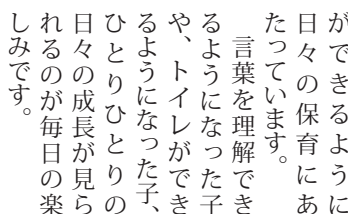


ことばかりで、悩むこともたくさんありました。それでも頑張つていられるのは、子どもたちのお陰です。大人が想像もしないような子どもたちの発言に元気をもらつたり、何気ない行動に心を癒されたりしている。「今度はどんなことをするのか」と「今度はどんなことが私のな？」とワクワクした気持ちで私の中に芽生え、どんどん前向きになっていきました。運動会やおゆうぎ会の行事を通して、子どもの大きな成

みよっ。」と日々思います。また、子どもたちだけでなく、周りの先生方や家族の支えがあつてここまで来られたと思います。1年目で学んだ事をこれからの自分の保育に良い形で取り入れていけるといいなと思います。大好きな子どもたちと過ごせる日々を大切にしながら、初心を忘れず、子どもたちの夢を応援していく先生になりたいと思います。

志村華菜

幼稚園の先生になりもうすぐ1年になります。幼稚園での毎日は、授業で勉強していたよりも大変です。子どもたちと楽しく過ごす中で叱りたたくこともありますが、毎日子どもたちも安心して過ごし、今日も楽しかったと言って笑顔で1日を終えること



専門学校では保育の教材を作ったり「保育をする」とはどのような仕事なのかを勉強し楽しく学ぶことができました。ピアノは少し苦手でしたが、友達に教えてもらったりマンツーマンで指導していただいて、苦なく練習することができました。幼稚園の実習は大変でしたが、充実して終えることができました。実習を終えた頃には、幼稚園の先生になりたいと強く思うようになりました。そして今、夢だった

園、密を避けての保育や行事の見直しなど、ひとつひとつ先輩の先生方と協力して保育にあたってきました。研修に参加する機会も少なかったのですが、リモート研修など新しい型で勉強させていただくこともできました。今年度を振り返り学んだことや反省点を生かして2年目からは保護者の方から信頼され、同僚の先生方からも頼られるように日々努力をし続けていきます。



保育の窓 コミュニティ

私を変えてくれた言葉

黒田幼稚園

野澤実由

小学生からの夢だった「先生」として働いて、あっという間に5年が経とうとしています。思い通りにいかない日々が続くこともあり、この仕事に向いていないのではないかと・・・そんな思いが何度も頭の中をよぎったこともあります。ですが、今では「先生って楽しい！」と心の底から思えるようになりました。それは、先輩との会話に出てきた、ある言葉がきっかけでした。

分からないことが分からなかった1年目。年少組を受け持たせていただいた私は、勉強、勉強の毎日でした。保育の面白さや楽しさに気づける余裕など一切なかったのが正直な気持ちです。でもそんな私を変えてくれた言葉に出会いました。それは、「子どもたちのキラキラした目が好き」という言葉。恥ずかしながら当時の私は、自分のことで精一杯になっていたため、子どものキラキラした目など感じたことがなく、とても衝撃を受けたことを覚えています。その言葉を聞いた時、「私も見てみたい！」と、ワクワクした気持ちになりました。そんな思いを抱いた日から、今まで以上に子ども側の立場で保育の内容を考えること、自分自身



が子どもたちが夢中になって話を聞いてくれたのです。本当に子どもたちの目が輝いているのが分かりました。私が初めて、保育の楽しさに気づけた瞬間です。今でもその場面が思い出されるほど、嬉しい記憶として残っています。私に保育の魅力

を改めて気づかせてくださったことに感謝の気持ちで一杯です。

そして、現在も年少組の担任。「キラキラした目」が見られるよう、日々子どもたちと向き合い保育に努めています。そんな私に毎日のように「今日も楽しかったね！」と声を掛け、満足そうに帰っていくクラスの子どもがいます。嬉しすぎる瞬間です。5年経った今だからこそ、初心を忘れずこれからも頑張っていきたいと思っています。

も子どもと一緒に楽しんでみることを意識するようになりました。

そしてそれから1年が経った2年目の時。ついに私にも、「キラキラした目」を感じられる日が訪れました。それは、運動会後に行ったおやつパーティーの時のことです。材料を出したり、手順を話していく中で、次は何が始まるのか、ワクワクしながら子どもたちが夢中になって話を聞いてくれたのです。本当に子どもたちの目が輝いているのが分かりました。私が初めて、保育の楽しさに気づけた瞬間です。今でもその場面が思い出されるほど、嬉しい記憶として残っています。私に保育の魅力

憧れの幼稚園の先生になって

富塚幼稚園

川村磨史

幼稚園の先生になることは、私の小さい頃からの夢でした。幼稚園時代の担任の先生が大好きで、憧れの気持ちを持っていたことを今でも覚えていています。また、姉が先に幼稚園の先生という職業に就いていたこともあり、身近な存在が夢の後押しをしてくれました。



就職して初めての担任は年少児クラスでした。大先輩の先生とペアを組ませていただき、2人担任としての1年目が始まりました。夢を叶えて嬉しい気持ちの反面、毎日が失敗の連続で、どうしても上手に保育を進められるのかと悩む日々でした。先輩の先生は子どもたちを惹きつけるとても楽しい保育をされていて、私もこんなふうに保育できたら・・・と強く思っていました。日々自分なりに考えながらも困った時は相談させていただき、今の自分があるのは一緒に働く先生方のおかげだと感じています。失敗を恐れずに自分の行いたい保育に挑戦できるようにしたり、失敗をしても挫けずに反省を活かして頑張れるようになりました。

8年目の今は再び年少児クラスの担任をさせていただいています、それまでに年中児クラス、年長児ク

ラスの担任も経験してきました。正直、大変だと感じる事はありませんが、それ以上にどの学年にもそれぞれの楽しさやり甲斐がありました。幼稚園の先生という職業はとても魅力的であり、この職業に就けて本当に良かったと心から思います。また、何より楽しさを感じるのは、個性豊かで特徴が異なる子どもたちと毎日過ごせることです。クラス人数分の姿があり、子どもたち一人ひとりに合わせた援助が難しいと感じる事はありませんが、子どもたちそれぞれが見せてくれる成長は本当に素晴らしい、感動することばかりです。純粹で素直なかわいい子どもたちとの関わりは、私のエネルギーとなっており、幸せを感じます。また、幼稚園を卒園しても元気に活躍し、幼稚園に遊びに来てくれた子どもと会う事ができた際にも喜びと嬉しさを感じます。

これからも子どもたち一人ひとりの関わりを大切に、成長の手助けが出来る保育者を目指していきたいです。私が憧れの気持ちを持ったように、子どもたちにとっても安心して好きな先生になれるよう努力を続けていきたいです。

我が子の成長と保護者会活動

認定こども園わかば幼稚園

保護者会長

鍵山晃二

我が家には中学三年生の長男、中学年生の次男、年長組の三男がいますが、揃ってわかば幼稚園にお世話になりました。三人の在園期間を合わせると「十二年」にもなり、長年にわたり我が子の乳幼児期の教育にご尽力いただいた先生方には心より感謝申し上げます。

それぞれ当時を振り返ると、長男は乳児期に入退院を繰り返していたため、園の生活に馴染めるかと心配していたことを思い出します。しかし実際は、親の心配をよそに楽しい園生活が送れたようで、その表れに卒園式ではみんなとの別れが辛く、人一倍泣いていたことを覚えています。

次男は園に行き

たがらず、送り届けることが大変でした。迎えのバスが来ても大泣きして乗車を拒否。登園をドライブスルーに変えても先生と車から引つ張り出すことが毎日の日課でした。当時は大変で恥ずかしくもありましたが、今となっては良い思い出になっています。

そんな長男と次男の現在は、小学校から始めた野球に打ち込み、当時から想像



できないくらい遅くなり、親としても喜ばしく思っています。

三男は生後六カ月からお世話になっているため、約六年間在園したことになりました。当時は物心がつく前に園に預けることを不安に感じていましたが、これまでに大きな病気もなく、元気に過ごしているのは乳児期の園での生活が大きく影響していると思っています。園で過ごす時間も残りわずかとなりましたが、ここで学んだことや経験したことを心の糧に、優しく元気な小学生になることを願っています。

また、私は長年お世話になったわかば幼稚園への恩返しになればと令和元年度から保護者会長を引き受けました。当初は不安もありましたが、役員さんをはじめ保護者の皆様のご理解とご協力により円滑な保護者会活動を運営できましたことを心より感謝申し上げます。

今年度は、新型コロナウイルスの影響で恒例行事が中止や縮小となり、残念な思いをしたのは私達だけではないと思います。未だ感染拡大が収まらず、私達の生活や園での生活を二変させた新型コロナウイルスは本当に憎く思います。一刻も早く収束し、もとの生活に戻れることを切に願っております。この先もコロナに負けず共に頑張ろう！

親の成長

静岡聖光幼稚園

P T A 会長

小西 謙司

我が家には九歳の長男・六歳の長女・五歳の次女がいます。長男が誕生して以来、子どもたちの成長には、驚かされること、感動させられること、幸せな気分がにぎやかになることが、本当にたくさんありました。

次女は、何でも兄と姉の真似をしたがり、一歳七ヶ月の頃にはオムツを卒業してパンツをはいていたのには驚きました。長女は絵本がとにかく好きで、いつも絵本を読んでくれるうちにあつという間にひらがなを覚え、まだ就学前なのに漢字をたくさん読めるようになっていきます。本当に感心です。

最近では、三人揃って空手を始めました。当初の予想に反して、三人とも稽古に気に入ったようで、中でも長男が一番意欲的で、いち早く昇級し、更に上の級を目指し、毎週稽古に、真剣に取り組んでいます。

普段、子どもたちが美味しそうにご飯を食べているところや、一緒に遊ぶところを見ると、とても幸せな気持ちになります。妻も子どもといえる時はとても楽しそうにしていますし、笑顔が増えた気がします。

当たり前かもしれませんが、親は子どもの様子を毎日見ることができます。人の子は毎日見ることができません。



ので断片的にしか見られません。「子どもはこうやって毎日少しずつ大きくなっていくのだな」と実感することが多々あります。

また、子どもにつられて、親も成長させられている気がします。子どもを持つ前は、自分の中に未熟な部分がたくさんあった気がしますが、子育てを通じて、自分もたくさん勉強させられた気がします。独身時代のわがままな自分が本当に恥ずかしいくらいです。子育ては非常に価値のある体験ではないかと、つくづく実感しています。

子どもたちが通わせてもらっている幼稚園も非常に大きな存在です。長男から始まり、幼稚園を利用させていたから六年目になりますが、「今日は幼稚園行きたくない」と駄々をこねたことは一度もありません。それだけ子どもたちにとって、幼稚園は居心地の良い空間なのだと思います。園長先生をはじめ、先生方には本当に感謝の言葉しかありません。

これからも子どもたちに負けないように親も一緒に成長していきたいと思っています。

新型コロナウイルスと 子ども・保育者の健康



宮入 烈

国立成育医療研究センター
感染症科診療部長
感染制御部統括部長

②家庭や集団教育の現場で出来る 新型コロナウイルス感染対策

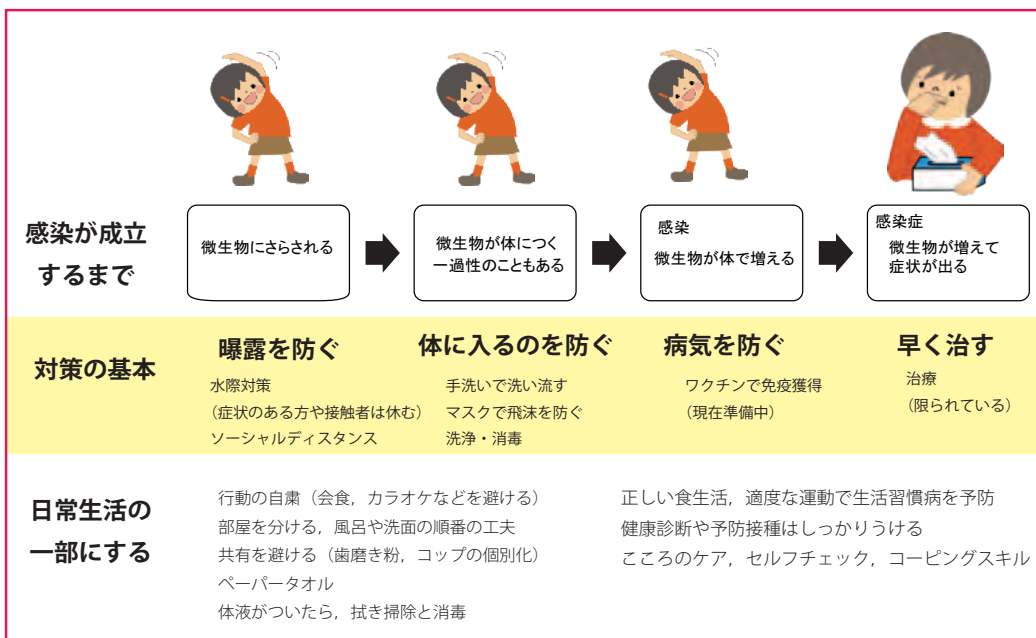
新型コロナウイルス(COVID-19)感染者の急増をうけて、2回目の緊急事態宣言が発令されました。初回とは比較にならないほど多くの患者がいて、東京では身近なところで感染者が連日発生しています。医療機関や保健所も手一杯で、感染して少し具合が悪くても自宅待機になる可能性が高い状況です。そこで今回は、子どもたちや自分自身を守るために行うべき感染対策と自己管理についてお伝えします。

(1) 感染対策の基本的な考え方

感染対策の基本は感染が成立する各ステップを複数の方法でブロックする事です(図)。微生物の種類によって対策は少し異なります。新型コロナウイルスは主に飛沫(咳、くしゃみで発生する小さな水滴のようなもの)と接触(唾液や便に汚染された手や環境)を通して感染しますのでこれを踏まえた対応が必要です。

(2) 集団生活や家庭内の対策はどれくらい意味があるの?

子どもとの時間は色々な意味で濃密です。幼稚園で半日を共に過ごし、家庭と同様の活動を送るなかで行う対策はどの程度有効なのでしょうか?



症)になる割合が半分程度であったと報告されています。

これらを踏まえると、日常生活で行うこまごまとした対策も意味のある事だとわかります。保育所や幼稚園におけるクラスターが注目されていますが、実際には感染者が紛れ込んでも、感染率は比較的低いこと

がわかっていきます。もちろん各地域の流行状況、幼稚園の構造、家族構成などによって、すべきことやできる事の違いは大きいですが、その一方で、家にある受験生のために1か月はできる事は何でもやるなど、期間限定であれば頑張れるかもしれませんね。

(3) 自己管理について

子どもたちをサポートするためには自分が健康であることが大前提です。感染が避けられない状況でも、感染した時に重症化するリスクを下げる努力はすべきです。新型コロナウイルス感染症の重症化リスクの多くは、肥満、高血圧、糖尿病などの生活習慣病です。正しい食生活、適度の運動、持病の管理など大事だとわかっていることをしっかりとすることが今以上に大事です。

こころのケアもとても大事です。子どもからのSOSを見逃さないために、簡単にできるスクリーニングを試してみましょう。また、自分は大丈夫と思ってもギリギリの線で頑張っている状態では、少しの事でバランスを崩しがちです。当センターのこころの専門家が作成した自己チェックやセルフケアの情報が役に立ちますので、是非活用ください。

<https://www.nccchd.go.jp/news/2020/20200410.html>
「コロナ×こども本部」で検索



今年も元気に過ごせますように～

鏡開き～



イエーイ!



富士山と風



うわ～! はっぱのあめ～!

なわとび大会に向けて



氷、冷たい



鏡餅をつくるよ! べったんべったん



バケツのお水が氷になったよ!



春を見つけたよ



鬼は～そと

【編集後記】

今年度もあと僅か。新しい生活様式の下、園の教育・保育活動にも大きな影響を受けた1年間でした。奇しくも協会創立50周年の年、新型コロナウイルス対応といった意味だけではなく、こども達の未来の為に、新しい幼児教育・保育様式を試行錯誤し確立していく。その先頭に立つのは私

立幼稚園・こども園であると、50年後も胸をはって言えるように、今後も一層、精進していかなければと感じます。少子化の影響もあり、園を取り巻く環境は厳しさを増していきますが、力をあわせ、切磋琢磨していきましょう。

広報副委員長/認定こども園みのり幼稚園 森川道晃

